第12回 ふくい建築賞

受賞作品

【大規模建築部門】

《最優秀賞》
いとよミライエこども園
設計者：㈲西川建築設計事務所　西川 国夫
施工者：大野建設工業㈱

《優　秀　賞》
越前ふくい美術館
設計者：㈱センボー建築事務所
仙坊 幸治　清水 一則
施工者：㈱関組

《優　秀　賞》
福井県立大学先端増養殖科学科
「かつみキャンパス」
設計者：協同組合 福井県建築設計監理協会
佐々木 基之　小林 正幸
河端 俊弘　増永 直也
施工者：㈱西野工務店、㈱時岡組、㈱藤本建設

【中小規模建築部門】

《最優秀賞》
八重巻酒店
設計者：㈱ヒャッカ　丸山 晴之　前田 光隆
施工者：松栄建設㈱

《優　秀　賞》
生もっちプリン専門店
設計者：田中建設㈱一級建築士事務所　斉藤 彰宏
施工者：田中建設㈱

《入　　賞》
ディノパーク ヴィロキ館
設計者：ますか建築デザイン　桝家 淳一郎
施工者：大北久保建設㈱

《奨　励　賞》
北陸銀行 大野支店
設計者：ヨコタ建築事務所　丸山 勇次
施工者：横田建設㈱

《奨　励　賞》
さくら通り整形外科クリニック
設計者：㈱走坂建築設計事務所　水上 諭　三中 一樹
施工者：㈱見谷組

《奨　励　賞》
㈱マツ勘社屋事務所棟・倉庫棟改修工事
設計者：一級建築士事務所 nuca architects　田中 宏幸
施工者：㈱槇建匠

【住宅建築部門】

《最優秀賞》
百尺の平屋
設計者：野路建築設計事務所　野路 敏之
施工者：建築工房 英

《優　秀　賞》
U－HOUSE
設計者：㈱BAUM建築設計事務所　岸名 大輔
施工者：㈱BAUM

《優　秀　賞》
21世紀初頭の家
設計者：アトリエ721　山 博充
施工者：㈱ハウジングサービス

《奨　励　賞》
勝山市北新在家に建つ伝統的民家
設計者：やすらぎの家設計工房　大月 和源
施工者：大南建設工業㈱

第12回ふくい建築賞　報告

ふくい建築賞実行委員会
矢　尾　憲　一

建築士会・建築士事務所協会・JIA建築家協会の設計３団体が主催し、福井県の建築業界の人材育成を目的に創設された「ふくい建築賞」は、今年度で12回目の開催となります。募集期間は前回より4カ月前倒しの6月9日～8月29日までで、大規模建築部門（延べ面積が500㎡以上）４点、中小規模建築部門（同500㎡未満）６点、住宅建築部門５点の合計15点（昨年14点）の応募がありました。

今年は県内建築関係9団体協賛+１団体共催+県・福井市をはじめマスコミ4社の後援をいただきました。心より感謝申し上げます。

一次審査は9月17日応募書類により実施。審査は蜂谷俊雄（としお）委員長（金沢工業大学教授）、野嶋慎二（しんじ）委員（福井大学教授）、五十嵐啓（ひろし）委員（福井工業大学教授）の３名により慎重な議論を経て、大規模部門３点、中小規模部門3点、住宅部門3点の計9点を二次審査対象作品に選びました。次に進めなかった作品から「北陸銀行大野支店」「さくら通り整形外科クリニック」「㈱マツ勘社屋改修」「勝山市北新在家に建つ伝統的民家」を奨励賞としました。

二次審査は10月17・18日の2日間にわたり審査委員が県内の現地を訪れ、直接設計者から説明を受けました。その結果、大規模部門３点、中小規模部門2点、住宅部門３点を最終審査対象作品に選びました。中小規模で次点となった「ディノパーク　ヴィロキ館」を入賞としました。

最終審査は11月22日(土)、今回会場をアオッサ6階に変えて約70人の聴衆が見守る中、公開審査会を開催しました。開催に先立ち、この建築賞の審査委員である五十嵐先生より『福井工業大学での設計教育の変遷と現状』と題した講演会が行われました。福井工業大学の前身からの建築学科の形成過程、また有名建築家を含む担当教授の顔ぶれを語っていただきました。

引き続き、最終審査にノミネートされた作品の設計者による各14分間のプレゼンテーションと質疑応答を経て、公開による熱心な議論が行われた後、



部門毎に審査委員による採点と講評が行われました。

住宅部門は「百尺の平屋」（28点）が最優秀賞に、「U-HOUSE」(26点)、「21世紀初頭の家」(21点)は優秀賞となりました。

中小規模部門は「八重巻酒店」(30点)が最優秀賞、「生もっちプリン専門店」(24点)は優秀賞に。

大規模部門は「いとよミライエこども園」(27点)、「越前ふくい美術館」（27点）と同点となり、審査委員の話し合いで「いとよミライエこども園」が最優秀賞に決まりました。「越前ふくい美術館」と「福井県立大学先端増殖科学科　かつみキャンパス」(25点)は優秀賞です。（（　）内は獲得点数：30点満点）

今回の作品同点で最優秀賞を決める際の判断基準は、点数以外に部門トップとした審査委員の人数に注目すると蜂谷委員長は語っておられました。

最後に各審査委員より総評がありました。

この建築賞も創設以来12年目となり、福井の気概ある設計者には季節の行事として定着してきたのではと感じています。県民に理解され支持されるために、継続していくことが大切です。来年度の「第13回ふくい建築賞」は、今回と同じく応募が８月末頃・最終審査会が11月となります。

会員皆様の来年度の応募を心よりお待ちしています。



■ 第12回ふくい建築賞　総評

審査委員長　蜂谷 俊雄（金沢工業大学教授）

今回で4回目の審査になります。応募書類と短時間の現地審査による評価になりますが、どの応募作品にも審査からは計り知れない様々なご苦労があったはずです。設計条件の難解度、建設コストの厳しさ、施設規模の大小、建物種別の違いなど、同じ土俵で評価して優劣を決めることの難しさを今回も感じました。各作品への評価は審査員の見識や経験をもとになされますが、その評価が絶対に正しいとは言えません。私の場合は、機能性、社会性を前提に、事業主や設計者の情熱、独自性、さらに自身の美意識も加味して評価をさせていただきました。

本建築賞の応募は県内在住の設計者に限定されていますので、応募作品は各部門とも小規模であり、北陸の気候風土、社会性や価値観が前提に検討がなされていました。難解なコンセプトや特異な形態をアピールする作品はなく、気負うことなく自然体で設計に取り組まれているという印象を受けました。最終審査会の質疑応答でも普段着の会話が交わされ、設計過程の舞台裏が垣間見れるような親近感を感じました。ここに本賞の良さがあると思います。

今回で４回目の審査となり、入賞者が常連化していることを益々感じるようになりました。書類審査では応募設計者名がわかりませんが、前回あるいは前々回のあの人の応募ではないかと感じ、現地審査の説明会で予想通りということもありました。設計者は別の事業主・敷地・建物種別で一期一会のように設計をされていますが、その作品のどこかに設計者ならではの痕跡を残しています。著名な建築家の作品集を拝見すると、一見違うように見えても、その作家ならではの設計理論や美意識が出ています。それを建築家の作家論として記述されるのが建築評論家です。本建築賞の常連者に対しても同様のことが言えると思いました。年１回開催される本賞を、ご自身の設計活動をお披露目できる場、審査員との質疑応答によって自己研鑽する場、真摯に建築設計に取り組む仲間との交流の場として、有意義に活用されることを期待いたします。

住宅建築部門

1. 百尺の平家

周囲の自然は美しく連なる山々が遠景として見える敷地の特性を生かした静かな佇まいです。東西方向に直線的に伸びる平面構成で、住戸内を駐車スペース、パブリックゾーン、プライベートゾーンに分け、平面形の長手方向に明確に分離することで、空間に『静と動』、『陰と陽』、『開と閉』というコントラストが生まれています。これらに連続する百尺の切妻屋根を被せることで、当地の場所性に相応しい自己主張を抑えた静謐な姿として映ります。

自然豊かな場所ですが、極寒の季節の熱損失を抑えるために外を眺める大きな開口はLDKの南側のみに限定し、その見せ方に工夫がなされています。一つ例をあげるとすれば、LDKの棟木を支える柱と軒桁を支える柱が半分ずらして配置されていることで、外の風景がより感じやすくなっていました。

本作品で最も感銘を受けたところは庭のつくり方、特に敷地外との境界を示す自立壁の在り方でした。街中と異なり境界壁をグルリと回す必要はありませんが、周囲に広がる風景の中の結界表現として、絶妙な長さ・高さ・位置で自立している姿でした。古来、風景を切り取って見せるという手法は日本庭園では一般的ですが、近景（庭）と中景（周囲の自然）を分ける位置に、部分的にその足元を隠す何かを置くという手法に、設計者の作意を感じました。（この逆の手法が大徳寺弧蓬庵忘筌の雪見障子です。）また、つくり込まない庭の中に１本存在するケヤキが効いています。その配置や樹高というよりも、巡る季節や年月の経過、家族の出来事など、様々な時の経過を包含し、常にその場にあり続け、時間軸の中で生き続ける一本のケヤキを植えていることです。

2. U-house

本住宅の特徴は外観が示すように屋根形状の特異性でした。一見では方形屋根を変形したものに見えました。しかし、平面形の中央部にパティオがあり、最高部を中心におくことはできず、北側に大きく偏心した頂部位置になっています。さらに、その状態で勾配をゆるやかにカーブささせることで、瞬時に屋根の全体像が把握できない不思議な屋根のシルエットとして映り、街並みにやさしく大らかなイメージ与えています。

詳しく資料を見ると、景観から生まれた形状ではなく、屋根雪がゆっくり滑り落ちるためのアイディアであり、雪が早く溶けるように南側屋根面を大きくするために頂部を偏心させていることがわかりました。景観優先の屋根形状ではなく雪国という地域性から発想された屋根の特異なデザインであり、

「ふくい建築賞」が目指す地域性を生かすという意味において高く評価しました。

3. 21世紀初頭の家

日本家屋が古来大切にしてきた自然の採光や通風を重視せず、人工照明や機械換気で済ます傾向が昨今の住宅購入者に増えていることに問題意識をもち、本作品によって居住環境のあるべき姿を提示しています。住宅の構成要素を部位ごとに丁寧に設計し、形態や空間に意匠設計としてのこだわりを感じることができる作品でした。

中小規模建築部門

1. 八重巻酒店

旧住宅地によくある間口が狭く奥行きの深い敷地で、昭和の時代によく見かけた酒販と角打ちのシーンや路地に並ぶ飲み屋のシーンなどを回想しました。現在でも形式や表現の違いはあるものの、このような飲酒の居場所が存在することに驚きました。奥まで通じる通り庭と採光通風の坪庭という伝統的な町家の空間構成はよく知られていますが、本作品では坪庭を土間に、通り庭を路地に置き換えた構成になっています。当敷地の場所性に相応しい建築の佇まいであり、神社との間に生まれた外部空間も心地良いスケールです。安価な鋼板と木材の質素なイメージの外観ですが、南西隅にある一本の独立柱の存在が空間に緊張感を与えています。

2. 生もっちプリン専門店

海と山に囲まれた自然豊かな国道沿いに、斜めに掛けられた水色のコンテナ状の不思議な形態が突然現れます。何かと思って車を止めて見たくなるような奇異なランドマークです。北陸の海と山の風景の中で、その対極にある南国の海辺を連想しそうなコバルトブルーのコンテナや、パステルカラーのオブジェなど、ほんのひと時、白日夢を見たような別世界感が楽しめました。建築らしく建てるのではなく、できる限りカジュアルに、インパクトとユーモアを込めて創り出された独創性が評価できました。

3. ディノパーク ヴィロキ館

恐竜のテーマパーク内に建つ施設で、恐竜のタマゴをイメージした大きな楕円形の屋根が特徴です。夢のある建物になるように、恐竜が覗く丸窓や恐竜が顔を出すトイレなど、遊び心のある仕掛けがありました。コストの制約を前提に、在来工法による単純な間取りと断面構成で空間を構築し、壁面画や展示物とコラボすることで、子供たちの夢の別世界を創り出そうとする情熱を感じました。

大規模建築部門

1. いとよミライエこども園

扇型の平面計画が特徴です。その中心になるのが遊戯室であり、その先端部に2歳から5歳の4つの保育室が配置されています。遊戯室の扇の要部に立つと、4つの保育室がパノラマのように眼前に広がり、さらにその向こう側に明るい園庭が見えます。歩けない0歳児と1歳時の保育室についてはＬ型平面部分にありますが、遊戯室に居ると常に園舎の全体の様子が把握できます。異年齢交流を楽しんだ遊戯室がまさに園児の記憶に残るシーンになりそうです。

2. 越前ふくい美術館

福井城址の堀に面する福井で最も景観上重要な場所に立地しています。県庁線側には大樹を囲む三角形の前庭があり、Ｌ型に平面が構成されています。一方、お堀側には城址の桜を眺めるお立ち台的なスペースが外壁に付加されています。城址のお堀に面して静謐で上品な姿を創出し、東山魁夷画伯の作品を鑑賞するに相応しい空間構成になっていることについては高く評価します。敷地に余裕があれば、半屋外のお立ち台と内部の展示ゾーンとの関連性をもたせることができたように思います。また、外部表現の主役である縦型ルーバーに外光をコントロールする役割はありませんが、ゆるくカーブを描き整然と並ぶ姿は美しく映りました。

3. 福井県立大学先端増養殖化学科「かつみキャンパス」

半島に囲まれて海が湖のように見える敷地です。このような自然に囲まれた海の風景を前にすると、その場所性から鳥羽にある『海の博物館』のようなヴァナキュラーな風情を醸し出す姿をイメージしがちですが、本施設はまったく対極の高級リゾート施設のように映りました。外装は立面のガラス、軒天の木材、柱のコンクリート（本実型枠）など高価な素材が精緻なディテールで納められています。また、建築形態は、巨大なスケール感を出さないように雁行型配置とし、スカイラインを和らげる寄棟屋根になっています。設計者としての真摯な取組姿勢を感じながらも、予想外の建築イメージに驚きました。

■ 第12回ふくい建築賞　講評

審査委員　野嶋 慎二（福井大学教授）

今回発表された候補作品は、場所の特性や機能の特性、暮らし方を丁寧に読み取り、それらを生かして外観や内部空間の計画に丁寧に反映させている作品が多く質の高いものであった。またそれだけでなく、良質な景観、街並み、気持ちの良い場所などを意識し、建築を通していかに社会や公共に貢献するかという意図も読み取れた。社会に埋め込まれる建築とは公的な行為である、と改めて感じさせる作品が多かった。各々の受賞作品について感想を述べたい。

住宅建築部門

1. 百尺の平家

農村に建てられた長さ百尺の細長い家である。切妻の屋根を持つ平屋のシンプルな形態であることから、農家の小屋がイメージされて、存在感がありながらも周囲の自然環境と調和している。

この建築の優れた点は、荒島岳や周辺の山々、蕎麦などの田園風景をうまく取り入れた配置計画とランドスケープの工夫である。適切な高さの木製の塀を部分的に設置することにより、囲まれ感を作り、庭空間を引き締め、あるいは遠景と近景とを程よく分離する役割を持つ。周囲の景観を邪魔しないようにシンボリックな樹木を置き、気持ちの良い庭を作っている。家のリビングからの景観は、京都の寺院の庭からの眺めのように、遠景を借景とし、柱割を考慮するなど、きめの細かい配慮によりその眺望は気持ちが良い。長さ100尺の平面は、ガレージエリア、玄関・リビングエリア、寝室エリアにシンプルに分節される。自然の素材を使用した内部空間の細部の収まりは美しく、外部の田園の風景の良さを生かした、内部空間・外部空間共に丁寧に作られた優れた作品といえよう。

2. U-house

この住宅は、住宅地の景観を意識した外観に特徴がある。曲率が大きい円形で、わずかにカーブした反りをもつ寄棟の屋根形状は独特で美しい。正面のピロティ部分は駐車スペースと玄関アプローチを兼ねており、車庫の車が見えるにも関わらず、屋根を含む建物全体のプロポーションが美しいため、住宅地の街並みに良質な景観を作っている。

建物はUの字の配置で、敷地をいっぱいに使ったコートハウスであり、中庭を持ち、光と風を取りいれることができる。間口5mほどの小さな中庭であるが部屋の各所からこの中庭を見ることができ、白い壁とシンボリックな樹木で構成された中庭は、その寸法以上に大きな広がりを持ち、気持ちが良い。内部空間は、Uの字の端から端まで中庭を回遊する動線であり、展開が魅力的である。また細部においても、扉周りのディテールに気を使うなど気持ちが良い。住宅地に彩りを与える美しい外観を持つ都市型住宅の優れた作品である。

3. 21世紀初頭の家

この作品は住宅メーカーのモデルハウスとして、昨今、流行と思われる一般的な施主の要望を想定しながらも、日照や通風など必要な環境を担保しようとする考え方で作られている。外観は、3つのブロックがずれて組み合わされる形をしていて、見る角度によって異なる景観を作っている。また、袖壁が斜めに切られていて外観にアクセントを与えている。内部は、窓を多めに取り明るく、家の中に小さな居場所をいくつも設けるなど、歩いていて発見がある。建築家の意図と遊び心が伝わり楽しい暮らしができる住宅である。

中小規模部門

1. 八重巻酒店

地方都市の駅周辺は必ずしも活力があるわけではない。こうした課題に対し、酒店のオーナーが街の活力を高めるために酒店だけでなく、角打ちのある建築を作ったことは意義がある。敷地は隣が観音堂であり、間口が狭く奥行きの長い敷地である。この細長い敷地を活かすため、町家の空間構成を取り入れている。隣の観音堂と建物の間に敷地を貫く通り抜け土間を配した。通り側から、ミセ空間、座敷、中庭、蔵などを一列に配置した。内部の空間を通り抜け、外部の通り抜け土間を通る、回遊空間が作られている。ミセ空間には酒屋、中庭の代わりに中土間を作っている。これは角打ちと酒屋を分離しながら程よくつなぐ役割を果たし、イベント空間など多様な使い方ができる。シンプルな空間構成であるが、場面が展開し、昼と夜、あるいはハレとケ、様々な顔が見られる。ファサードも切り取られた空間から入り、入ってみたくなるような雰囲気を醸し出し、街に艶を与えている。

角打ちと酒店をどのように作れば活気につながるか、こうした問いに対する回答が、示されているようだ。

2. 生もっちプリン専門店

近年、コンテナハウスをはじめ、仮設性のある建物が増えている。敷地は、国道8号線と県道204号線の交差点に位置し、若狭湾を望む景観の良い場所に立っている。この建物は、仮設性のあるコンテナ風の外観を持つボックスを組み合わせ、斜めに立ち上げることでインパクトのある風景を作っている。自然風景の中にありえないものを対比させるパブリックアートの意図があり、周囲の目を引くことに成功している。コンテナの屋根なども立体的に活用し、回りの風景の視点場にするなどコンテナハウスの可能性を引き出している。プリンの販売所との組み合わせで、誘客において相乗効果を出しており、遊び心のある作品である。

3. ディノパーク　ヴィロキ館

恐竜博物館の敷地に建つ、バスの待合所として作られた。恐竜の卵をイメージした楕円形の屋根が傾斜して設置されており、園内の施設であることを明示している。トイレの中、恐竜のペーパーホルダーや壁にかけられた模型があり、楽しい。待合の間も飽きさせない工夫がされており、恐竜博物館の施設としてふさわしく遊び心がある建物である。

大規模建築部門

1. いとよミライエこども園

こども園は、暮らし、教育、交流の場であり、建築は、その機能やプログラムを実現するための重要な要素であり、近年、少子化とともにその役割はますます重要となっている。この作品の優れた点は、部屋の配置計画にあると考える。建物の中心に四分円の形態をした天井の高い遊戯室を配置し、その周りに曲線部分に保育室を配置し、直線部分に調理室や事務室などを配置しており、遊戯室を通って全ての部屋に入る構成である。そして遊戯室、保育室、園庭と円滑に繋がる。これにより、保育士さんの働き方を考慮した円滑な動線となっており、廊下など無駄なスペースを必要としていない。またこうした効率性だけでなく、保育室と遊戯室と園庭との行き来など園児の多様な遊び方や、学年の違う園児同志の繋がりなど、そこから生まれる遊びや豊かな生活や教育効果が期待できる。内部は集成材の柱・梁、シナベニアの壁、床フローリングによって、木材の柔らかい雰囲気が醸し出されており、温かい保育環境が作られている。明るいトイレも気持ちが良い。暮らし、遊び、教育、交流を高度に行える環境が整う、秀逸な作品である。

2. 越前ふくい美術館

福井城址のお堀に面する場所、歴史的にも社会的にも、そして景観的にも重要な場所に建てられている。三角形の敷地に対してL字型に2階建の低層の建物を配置することにより、通りに面した庭を作り、それがアプローチ空間となるとともに、全体として通りの景観を作り出している。コンクリート打ち放しと金属製の庇とルーバー、ガラスというシンプルな素材と色で構成することで樹木と庭を引き立たせ、気持ちの良い前庭空間となっている。また城址側は、花見台を作り、これがアクセントとなっている。

こうして街に対して気持ちの良い滞在の場所と美しい街並み景観を作り出すことに成功している。

2階の展示室は、越前和紙を使った日本画家東山魁夷の作品をいかに際立たせるかを意識し、暗めのシンプルな3つの展示室が小さな入り口で連なり、小さな展示空間からメインの大きな展示空間へと移り代わる。部屋のスケール、明るさ、上下の動きなど、その展開が計算された動線計画は洗練されている。

この場所にふさわしい機能と形態をもった優れた作品である。

3. 福井県立大学先端増養殖科学科「かつみキャンパス」

穏やかな美しい風景を持つ若狭湾に面して建てられている。実験室や講義室を含む小さな大学キャンパスであり、養殖技術を研究教育する施設の特色を見ても、若狭湾や集落群の中に立つその地域性や立地を見ても海の自然の中に溶け込み、調和する施設であることが望まれる。

この作品の優れた点は、若狭湾の風景との内部空間との関係を軒の深いデザインされたテラスにより高めている点にある。研究棟内部からの若狭湾の眺めと、若狭湾から見た内部空間の研究活動や学生の活動風景が呼応する。周辺の漁村集落をイメージして、建物を分節化し、雁行して配置された全体の景観は、奥ゆきやパース効果を生み出し、荘厳性と美しさを作り出している。

これら豊かな環境スペースは、どちらかといえば研究・教育のための効率重視になりがちな大学キャンパスの一つのあり方を示していると言える。

■ 第12回ふくい建築賞　講評

審査委員　五十嵐 啓（福井工業大学教授）

住宅建築部門

1. 百尺の平屋

現地審査の際は大変天候に恵まれたこともあって、この建築が持つ、豊かな暮らしを実現させる力を十分に感じることができた。敷地に到着し道路側のやや閉鎖的で静かな印象の北面ファサード左手に穿たれたポーチをくぐり、玄関引き戸を開けると、庭を臨む窓のある玄関ホールとワークルームがあり、さらに引き戸で仕切られたその奥に、広々としたワンルームのLDKがある。空間が段階的に庭に対して開き、引き戸を開けるごとに変化する、実に楽しい驚きを感じさせてもらった作品であった。LDKの２本の柱の仕上げや庭の板塀の意匠、ケヤキの配置など設計者のここでの暮らしに対する丁寧な態度が実現された作品となっていた。

2. 21世紀初頭の家

書類審査で見た立面図の斜めに立ち上がる外壁が印象に残っていたが、現地審査では展示場ということで、設計者の住まいづくりに対する強い思いをお聞きできた。設計者は環境共生を軸として自然光、自然通風を重視されており、作品はそれを立体的にまとまりのあるデザインで実現していた。吹抜けをもつリビングに設置された階段の遊び心あるデザインや色使い、レベル差のある梁、変化に富む屋根形状を取り入れた内部空間等、設計者の意図する光や風が家全体に満ちる様子を視覚的にも感じさせるものとなっている。これからたくさんの方がここを訪れると思われるが、是非、設計者の思いも一緒に届けられたらと思う。

3. U-house

何といっても東正面の写真が美しい。反りをもつ屋根が一点に集まった屋根はとてもかわいく魅力的である。積雪への配慮も兼ねて収束点を北にずらし、そこにパティオの採光用の開口を設けたりと、この美しいフォルムを木造で実現するには、コスト面も含め施工への様々な工夫やご苦労があったと思われる。中庭をもつL型の室内空間を見事にまとめられており、設計者の力量を十分に感じることができた。現地審査の際、審査資料でも強調されていたご家族ご自慢のヴィンテージ家具がこの家の空間を一層豊かなものにしており、周囲に見せる、どちらかといえば静かなたたずまいに対して、内部は変化に富んだ艶のある楽しい空間が広がっており、いい意味でギャップを感じさせる家となっている。

中小規模建築部門

1. 八重巻酒店

間口7.7m奥行41.78mという、店舗を構えるのには大変不利な土地に５mほどの間口で3つの用途を配置するという要求に対し、このような解を示されたことに、設計者の豊かで柔軟な発想力と実現に導く確かな力量が認められる。震災観音堂という得難い隣人を得て、開放的な路地を設けることが可能となり、店舗、角打、倉庫がそれぞれ互いに邪魔することなく機能を果たせている。また、用途間に計画された登り梁の土間空間は、ラフな仕上げや大開口を可能にする引き戸と相まって、空間に余白と広がりを生みだし、この作品の気持ちよさにつながっていると感じた。近所の人の立ち寄り場として、また、何かの時に思い浮かぶ場所として、地域に愛される場所ができたと言えるのではないだろうか。

2. 生もっちプリン専門店

コンテナハウスを斜めに設置するという発想を、本設として実現させたことに何よりも感心させられた。建築の世界を一歩も二歩も飛び越える苦労が設計にも施工にもあったはずで、割り切りとこだわりの境界に悩まれたと想像するが、結果としてとても印象に残る「映える」作品が生まれたと感じている。SNSでの広がりはどれほどだろうか。そんなことが気になるこの作品には新しい評価軸が必要だった。反省している。また、同じような経歴を持つ身として設計・施工一貫で取り組まれたことも驚きで、福井の建設業で働くことを、自由でおもしろく感じてくれる若い世代が増えるきっかけになればと感じている。

3. ディノパーク　ヴィロキ館

福井県立恐竜博物館は2024年度126万人が来場、福井県にとって大変重要な観光コンテンツであり、この建築はその体験に厚みを加える役割を担っていると思う。博物館の迫力ある展示を味わった後、今度は体を使った楽しい体験ができるよう、内装や仕掛けがいたるところに工夫されている。外観は、卵をモチーフにした円形の屋根が遠くからでも人目を引き、その屋根にはヴィロキラプトルが走り回っている。窓からのぞく恐竜など、建築とオブジェが一体となり、大変楽しい空間が広がっている。今後も多くの人がここを訪れ、記憶に残る楽しい体験をすることと思われるが、その体験を支える役目をしっかり担える建築となっている。

大規模建築部門

1. いとよミライエこども園

外観は1/4円の平面形状を持つ2段の屋根とその下の深い軒に縁取られた落ち着いた色使いの外壁が特徴的である。内部は燃えしろ設計の採用により園内全体に木のぬくもりが広がり、ハイサイドライトからの採光と相まって、とても気持ちのいい大空間が実現している。雪深い奥越の地であるにも関わらず15m近いスパンを木造とSの張弦梁ですっきり納めており、扇形に広がる遊戯室は躍動感のある広々とした空間となっている。また、遊戯室と保育室が直に接していることから園の皆さんの工夫次第で遊戯室の多層的な使い方も可能であろう。ここから巣立っていく園児たちがどのような思い出をもって成長していってくれるのか、また、後々園児時代を振り返ったとき、この空間をどう思い出すのか、非常に楽しみなこども園ができたと感じた。

2. 越前ふくい美術館

福井城址お堀に面するこれ以上ないロケーションに、美術館の建設を決断されたことにまず賛辞を贈りたい。角地でもあり、福井駅に続く県庁線とお堀側に対し、まず建築としてどのような関係を構築していくべきかという設計者としての考えがここに実現している。美しいコンクリート打放しで端正にまとめられた外観は、通りに対してセットバックし西洋菩提樹が美しく繁るオープンスペースとの相乗効果か、ここだけふっと異界の空気が流れているように感じた。内部は展示室が回遊式に配置され、東山魁夷作品の見せ方を詳細に検討されてきた施主のこだわりに対して、建築が応えた空間となっている。応募書類にあるように夜のライトアップも大変美しく、もう少し先ではあるが、桜の季節には多くの人がお堀側の花見台からの素晴らしい景色を楽しむことになるであろう。

3. 福井県立大学先端増養殖科学科

「かつみキャンパス」

若狭湾に面し遠くに青葉山を臨む大変自然環境に恵まれた場所にふさわしい建築は？とさぞ悩まれたことと想像する。作品は、遠景では端正に美しくまとめられた雁行寄棟のフォルム、近景では外壁の焼杉や天井杉板のこだわりの詰まった納めや杉型枠のRC柱のなど、地域性と先端性に加え、ここでの穏やかな時間までも追求し具現化した建築となっている。増養殖という生き物と向き合う地道な実験と研究活動に取り組む研究者や学生達が、モチベーション高く日々を過ごすことができるであろう豊かな空間が実現した。今後、ここでの研究が福井県の将来に大きな成果をもたらしてくれることを期待する。

■ 第13回ふくい建築賞作品募集 ■

応募申込：2026年6月8日（月）～8月24日（月）

応募申込書・建築概要書を提出してください。（FAX・メール可）
詳しくは募集リーフレットをご覧ください。

第12回ふくい建築賞
【大規模建築部門】

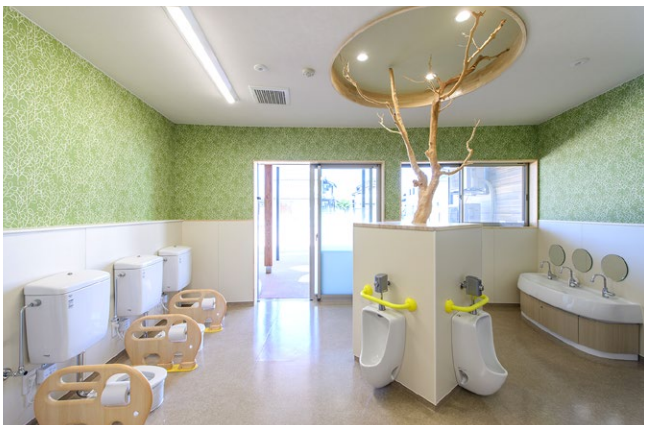


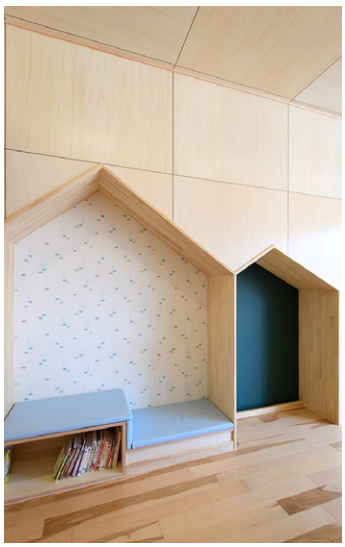
【最優秀賞】　いとよミライエこども園

設計監理：㈲西川建築設計事務所
　　西川 国夫
施　　工：大野建設工業㈱

建築位置：大野市清和町
工　　期：'25年8月～'26年4月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：2,867 ㎡
建築面積：　935 ㎡
延べ面積：　868 ㎡











いとよミライエこども園は、子どもたちが自ら関わり、学び、育つ環境とは何かを見つめ直し、「小さな発見が連続する園舎」を目指して設計しました。

日々の遊びを中心に、楽しさ・優しさ・思いやりを学び、みんなの笑顔があふれる園舎とし、木のぬくもりに包まれた落ち着きのある空間にしました。

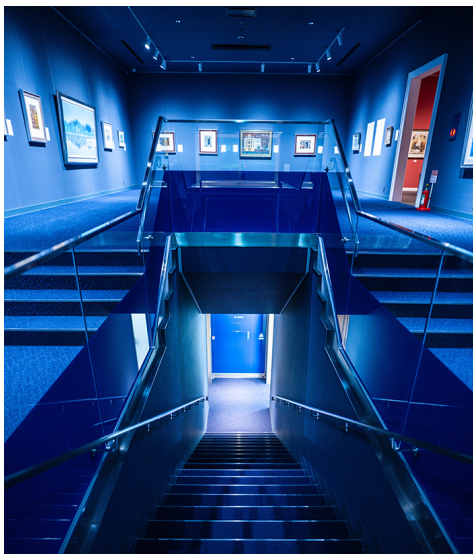
子どもたちの好奇心を引き出す遊び心を取り入れ、自主性を育むことのできる工夫を盛り込みました。

【優秀賞】越前ふくい美術館

設計監理：㈱センボー建築事務所
　　仙坊 幸治　清水 一則
施　　工：㈱関組

建築位置：福井市大手２丁目
工　　期：'23年7月～'24年3月
構造規模：RC造・地上2階
敷地面積：528 ㎡
建築面積：330 ㎡
延べ面積：576 ㎡





戦災復興事業が行われた福井市にとって福井城址は城下町福井の歴史が感じられる数少ない場所である。敷地は福井城址とお濠を挟んだ相向かいの場所にあり、JR福井駅と福井城址を結ぶ県庁線の先端に位置する。福井城址前という場所性から建物はシンプルかつ上品な飽きのこない小さな美術館をイメージした。東山魁夷画伯の作品を展示するに相応しい建築、そして地域の人達や県庁線を行き来する人達にとっては以前からこの場所に佇んで居たような建築を目指した。





【優秀賞】福井県立大学先端増養殖科学科「かつみキャンパス」

設計監理：協同組合 福井県建築設計監理協会
　　佐々木 基之　小林 正幸　河端 俊弘
　　増永 直也
施　　工：㈱西野工務店、㈱時岡組

建築位置：小浜市堅海
工　　期：'22年6月～'23年7月
構造規模：RC造・地上2階
敷地面積：8,516㎡
建築面積：1,251㎡
延べ面積：1,921㎡



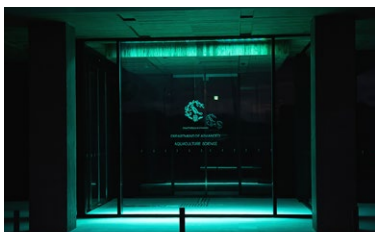
小浜市堅海地区は、目の前に穏やかな小浜湾が広がり、山々に囲まれた自然豊かな地域で、周囲には地域特有の建築形式を備えた集落が残存している。

繰り返される実験と研究活動は、コンクリートで囲まれた緊張感のある空間ではなく“家”の中で過ごしているような環境の中で行われるべきと考えた。

学生の緊張を解き、仲間や教授との会話が弾むことで“能動的な活動”を促す空間形成をめざした。





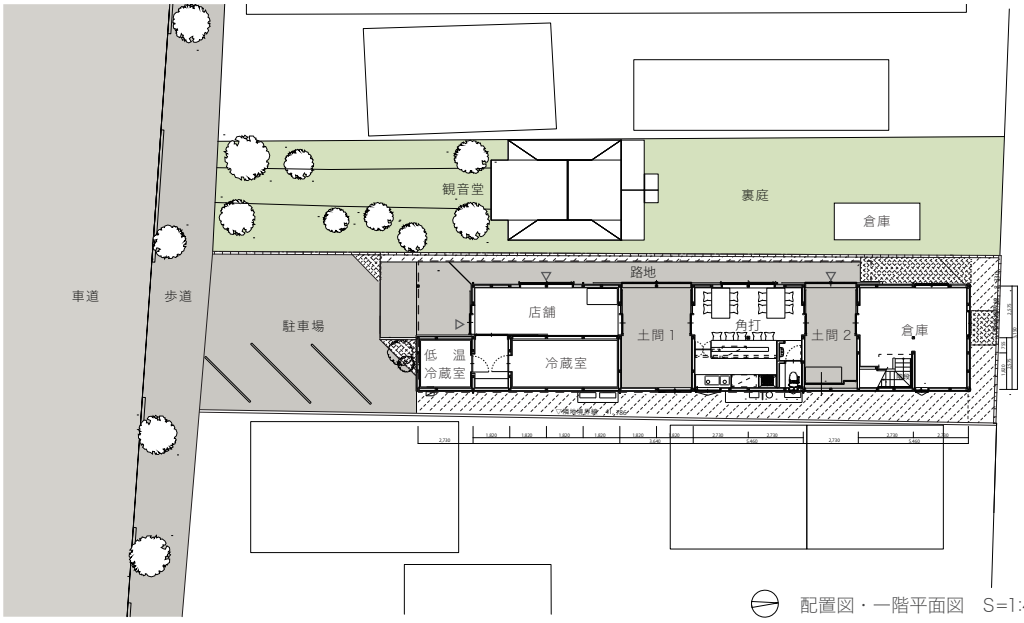


第12回ふくい建築賞
【中小規模建築部門】



路地と酒が拓く街
八重巻酒店





配置図・一階平面図　S=1:400









【最優秀賞】　八重巻酒店

設計監理：㈱ヒャッカ
　　丸山 晴之
　　前田 光隆
施　　工：松栄建設㈱

建築位置：福井市八重巻東町
工　　期：'22年11月～'23年4月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：333 ㎡
建築面積：146 ㎡
延べ面積：174 ㎡

４代続く酒店の老朽化に伴う移転計画である。新店舗では、従来の酒販と新規事業として角打ちスタイルのお店を営むことで、地域や森田駅の利用者を対象に訴求力を高めている。街中に埋もれていた観音堂の裏庭を有効活用し、道路とファサードの単層であった街並みに路地的役割を与えることで街の構造に深度をもたらした。

【優秀賞】生もっちプリン専門店

設計監理：田中建設㈱一級建築士事務所
　　斉藤 彰宏
施　　工：田中建設㈱

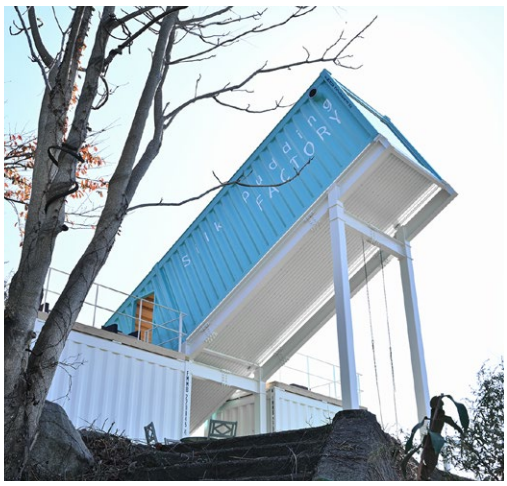
建築位置：敦賀市大比田
工　　期：'22年6月～'22年10月
構造規模：鉄骨造・地上1階

敷地面積：837 ㎡
建築面積：　79 ㎡
延べ面積：　79 ㎡













【各部門・入賞／奨励賞】

【中小規模建築部門】

【入　賞】ディノパーク ヴィロキ館



設計監理：ますか建築デザイン
　　桝家 淳一郎
施　　工：大北久保建設㈱

【中小規模建築部門】

【奨励賞】北陸銀行　大野支店

設計監理：ヨコタ建築事務所　丸山 勇次
施　　工：横田建設㈱

【奨励賞】さくら通り整形外科クリニック

設計監理：㈱走坂建築設計事務所　水上 諭・三中 一樹
施　　工：㈱見谷組

【奨励賞】㈱マツ勘社屋事務所棟・倉庫棟改修工事

設計監理：一級建築士事務所 nuca architects　田中 宏幸
施　　工：㈱槇建匠

【住宅建築部門】

【奨励賞】勝山市北新在家に建つ伝統的民家

設計監理：やすらぎの家設計工房　大月 和源
施　　工：大南建設工業㈱

第12回ふくい建築賞
【住宅建築部門】





【最優秀賞】 百尺の平屋

設計監理：野路建築設計事務所
　　野路 敏之
施　　工：建築工房 英

建築位置：大野市
工　　期：'21年5月～'22年3月
構造規模：木造・地上1階
敷地面積：1,367 ㎡
建築面積：　199 ㎡
延べ面積：　182 ㎡





周囲には視界を遮るものがなく、遠くに連なる山々を望む敷地。敷地形状や道路との接し方には少しいびつさがあったため、方位や眺望を丁寧に読み取りながら、この土地の環境や暮らしに馴染む形を探っていった。

たどり着いたのは、百尺の切妻屋根をぱさっと被せた、とても素直で素朴な佇まい。家の中から十分に眺望を楽しめることから、庭はあえて作り込みすぎず、暮らしの拠り所として一本の大きなケヤキを中心に据えた。

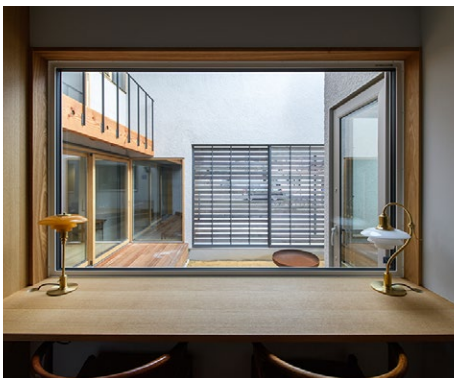
【優秀賞】U－HOUSE

設計監理：㈱BAUM建築設計事務所
　　岸名 大輔
施　　工：㈱BAUM

建築位置：福井市
工　　期：'21年11月～'22年9月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：298 ㎡
建築面積：177 ㎡
延べ面積：179 ㎡









【優秀賞】21世紀初頭の家

設計監理：アトリエ721
　　山 博充
施　　工：㈱ハウジングサービス

建築位置：福井市
工　　期：'22年11月～'23年11月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：204 ㎡
建築面積：91 ㎡
延べ面積：131 ㎡

